

山の辺窯 - ある陶芸家とその家族の物語 -



とある村はずれの山間。ある陶芸家が住んでいた。
頑固な陶芸家。村との接点はほとんどない。
なぜここに居続けるのか。

好きなのだ、この場所が。
この場所に生まれ、この場所に育ち、一度離れ、
陶芸を生業として生きると決めたとき、またここに戻ってきた。

ここに、自身の窯を建てた。
ここに、自身の家を建てた。

家族ができた。
一人で仕事をする場所は、家族と共に生きる場所となった。

時がたち、子供らは出て行く。
家族と共に生きた場所は、家族を迎える場所となる。

陶芸家が残りの人生を生き抜く場所。
家族が、再び帰ってくる場所。

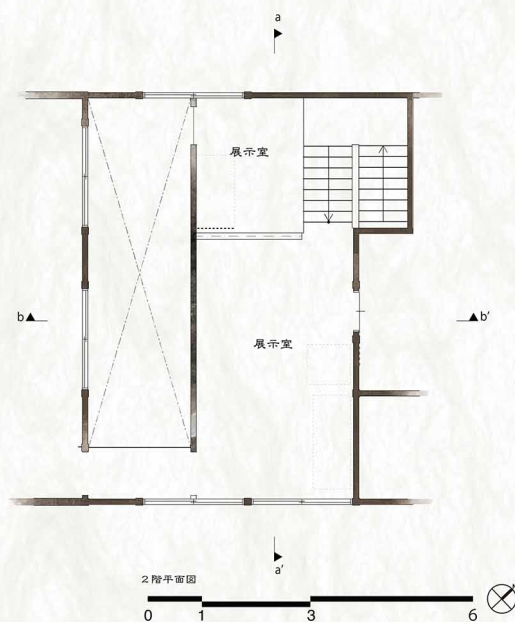
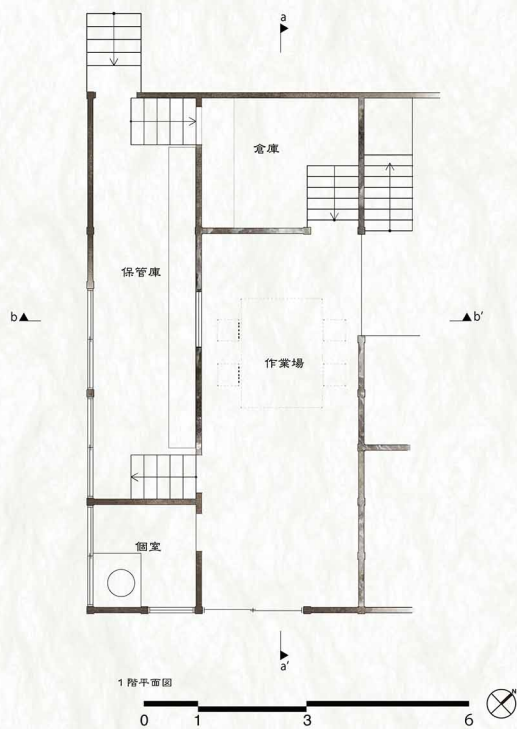
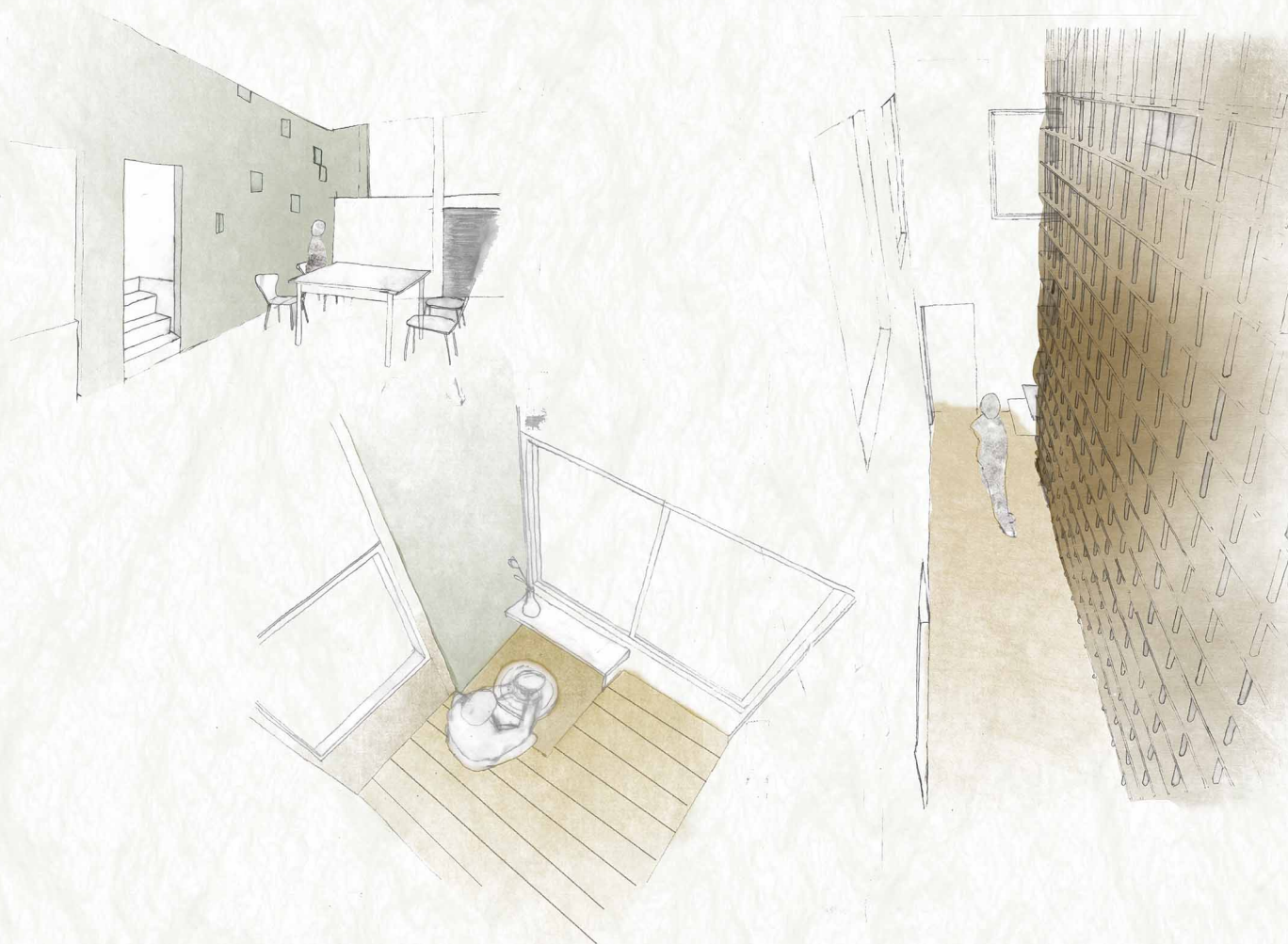
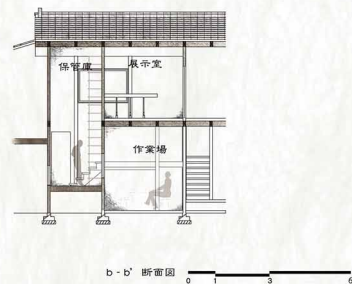
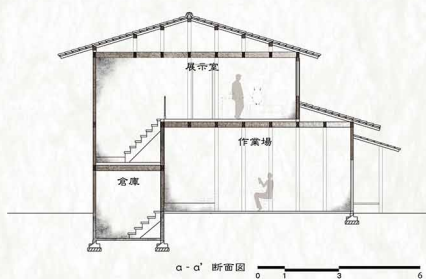
この窯の、未来を描く。

ー 仕事 ー

陶芸家の仕事が変わってゆく。
 何人もいた生徒は減り、広い作業台は不要となる。
 仕事場は自身が没頭するための場所。
 同時に、残すべき作品を残すべき場所が必要となる。
 展示室と仕事場が変化する。

■ 木と土

既存の木造躯体を捫り所として、土壁を増設し、
 仕事場・展示室の空間を変化させる。



一 茶室 一

茶室は非日常の空間。

仕事場ではない、仕事のために作られた場所。

陶芸家にとって特別な場所。

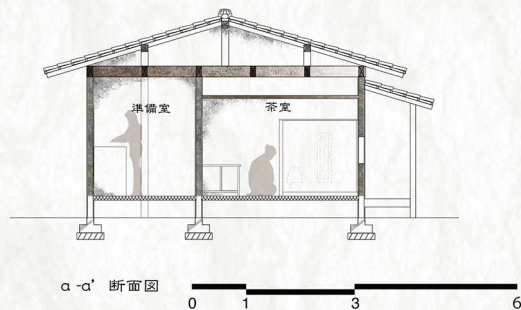
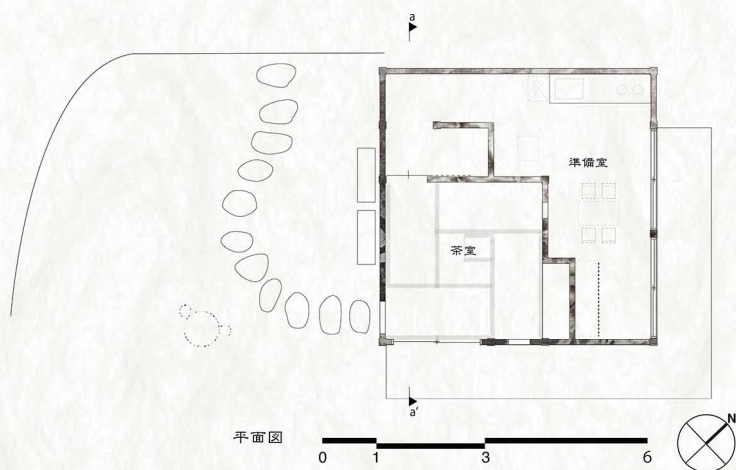
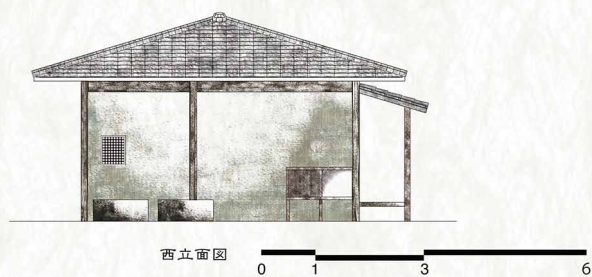
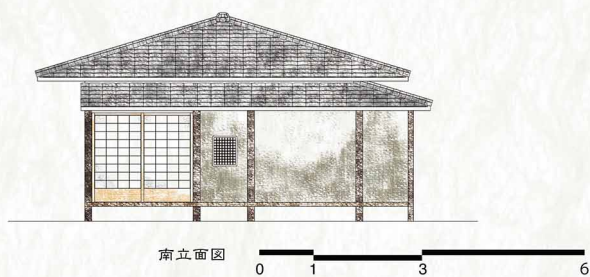
茶室のあるべき姿を再現する。

■ 陶器と茶室

日常と隣り合わせにあった茶室を日常から切り離す。

住宅内にあった茶室を、レベルの異なる場所に移転する。

陶芸家の庭にある陶製の机や椅子を用いて露地を作る。



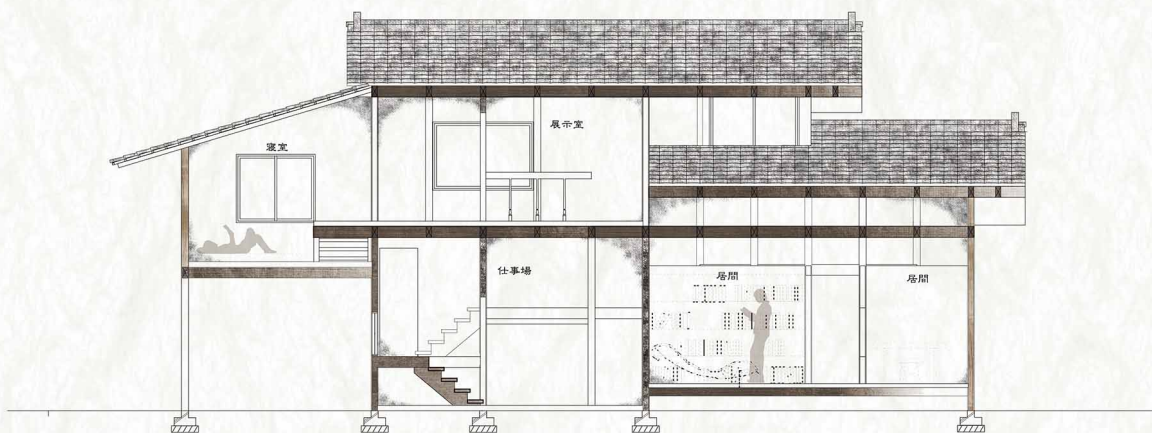
ー 生活 ー

子供らが出て行く。
陶芸家と妻だけで住むには、家は広く、大きい。
二人が暮らす場として、
帰って来る家族を迎える場として、
家が更新される。

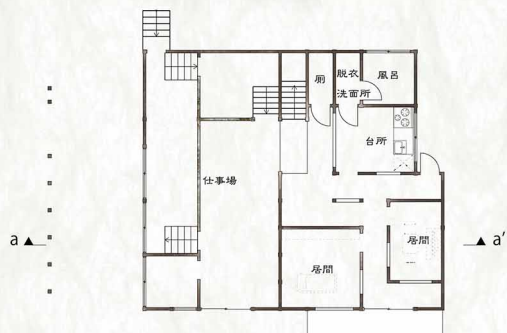
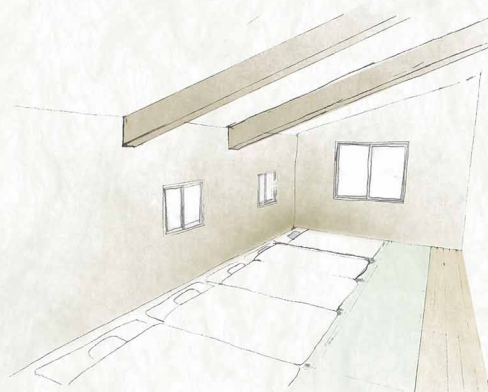
■ 小さな籠と大きな箱

生活空間に、住人のモジュールから作った籠を差し込む。
大きな空間を切り取り、小さなスケールに再構築する。

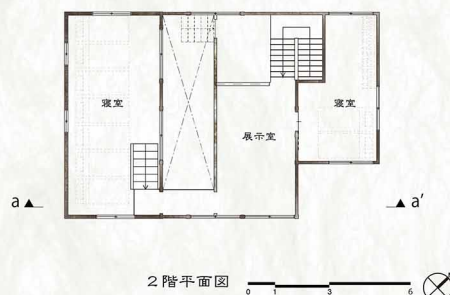
かつて子供部屋として遣われた増築部から壁を無くす。
大きな箱は帰って来た子供たちが共に眠るための場所となる。



a-a' 断面図 0 1 3 6



1階平面図 0 1 3 6



2階平面図 0 1 3 6

一 生きた証 一

陶芸家が人生を食うたとき、窯は窯としての生涯を終える。
そこになお残るものは、陶芸家の生き抜いた証。

■天国の光

陶芸家がこの世を去るとき、
ここには彼の陶器、生きた空間、そして登り窯が遺る。
これらすべてを彼の作品として展示する。

茶室、作業場、展示室を巡り、最後に登り窯をたどる。

最後の空間に半透明の膜で仕切りを作る。
膜を通る光は拡散光となり、空間を柔らかに包む。
陶芸家の生き抜いた空間をそのまま世界から切り離す。

